



1974年 茨城国体
「人と同じことをしていても、人と同じ結果しか出せない」。当時は1日に約78km走っていた。



夢と目標

「運 動会ではいつもビリ争いをしていました。短距離走は苦手です」と子ども時代を振り返る水上則安さん。そんな水上さんが「走ることを始めたのは、中学1年生の時だった。全校生徒1千5百人によるマラソン大会で、1年生でありながら3位に入賞。すぐに陸上部の顧問から誘いを受け、入部した。」

そのころ、ローマオリンピック(1960年)のマラソン競技で、エチオピア出身のアベベ・ビキラ選手が42・195kmを裸足で完走し、金メダルを獲得。2時間15分16秒2というタイムで当時の世界最高記録を樹立。世界中を沸かせた。陸上部でありながら靴を持っていない水上さんは、裸足で走るアベベ選手に自分を重ね、オリンピック選手を夢見るようになった。

道

オリンピックへの

すべてのスポーツの原点が「走ること」にあると言っても過言ではない。オリンピックでも、陸上競技は古代から常にその中心に存在し続けてきた。

1976年、カナダで開催されたモントリオールオリンピック。

日本の男子マラソンの黄金時代と呼ばれた当時、

日の丸を背負って出場したマラソン選手が、この町にいた。



福智町内の河川敷を中心に、楽しみながらトレーニングにはげむ水上さん。

「練習の前後に、急こう配の階段や上り坂を百回往復。誰にも負けないくらい努力はしました」と話す水上さん。果てしなく遠いオリンピックという夢に近づくため、ライバルに勝つ。大会で優勝するなどいつも目の前にさまざまな目標を掲げ、ひたすら努力を積み重ねた。その結果、中学2年生の時には田川地区で敵なし、3年生になると筑豊にも敵はおらず、出場した県大会では、当時の中学生日本記録を塗り替えるほど強くなっていった。

不屈の精神

順風満帆に思えた水上さんの人生にも、どん底まで落ちた時期があった。

高校卒業後、18歳で八幡製鉄に入社。朝から工場で働き、

東京オリンピック(1964年)出場の君原健二が所属する八幡製鉄陸上部で指導を受けた。ハードな練習の日々。入社して10か月が経ったころ、腰とひざの痛みが水上さんを襲った。それでも走り続けた水上さんの体は、とうとう医者がさじを投げるほど病状が悪化。激しい痛みで、一歩も走れなくなってしまうのだ。夢のオリンピックへと続く一本道を先頭集団で走っていた水上さんにとって、耐え難い出来事だった。

「自分の人生から、走ることゝがなくなるなんて、考えられなかったんです。寮の屋上から飛び降り、自殺したいと思っていました」。走れないストレスから、61kg

だった体重は、

78kgにまでなった。走っている仲間を見ては、悔しさに涙する日々が続いた。「医者が見放すなら、自分ですら、自分どころか、どうにかするしかない」と、苦悩の末に水上さ



んが考えたのは、痛みを体に覚えさせ、痛み慣れることだった。足を引きずりながら走る毎日。現代では考えられないこの荒行を、当時21、22歳だった水上さんは、5か月続けた。

「一度死を覚悟した人間が、満を持して決意したパワーはすごいですよ。奇跡的に痛みがなくなりました」と、かつてを語る。大きな壁を乗り越えられたことで夢をぐっと近くにたぐり寄せ、ラストスパートをかけることに成功した。

家族との絆

水上さんが28歳の春に開催された「第31回毎日マラソン」。夏に行われるモントリオール五輪出場選手の最終選考会を兼ねており、この大会で水上さんは2位に入賞。1位の宇佐美

彰朗、3位の宗茂と共に、第21回オリンピックマラソン競技の日本代表選手が決定した。15年間追い求めてきた夢をつかみ取った瞬間だった。

そして迎えた1976年7月31日、カナダ・モントリオール。大会最終日のメインイベントの種目に、観客は拍手と地鳴りのような歓声を送った。「スタート時の記憶が全くありません」。数々の国際大会に出場していた水上さんだが、この時の重圧は桁違いだった。日本の代表という極度の緊張とプレッシャーで、一気に順位を百位まで落としてしまったのだ。「このままじゃ日本に帰れない」。その時、水上さんを突き動かしたのは「家族」だった。

21歳の秋、夢を見失い、陸上を辞める覚悟で寮を飛び出した。そんな水上さんを包み

込んでくれたのは、実家の家族の温もりだった。正しい方向へ導いてくれた父と母。そして夢を一緒に追いかけて、食事や体調管理など、いつも近くで支えてくれた妻。家族の愛が水上さんにパワーを与えた。

中盤からの猛追で、水上さんは宗茂に続き21位でゴール。日本の入賞は果たせなかったが、2時間18分44秒2という記録を五輪で残したことは、水上さんの一生の誇りとなった。

現在は、障害のあるランナーの手助けなどをボランティアで行っている水上さん。「出会い、喜び、努力や諦めない心。マラソンをとおして得られるたくさんのことを、ぜひ一人でも多くの人に経験してほしいですね」と語るその眼差しは、今、夢を追い求めるすべての人たちへ熱く注がれている。

水上 則安 Profile

みずかみ・のりやす ● 昭和22年10月6日生まれ。福智町赤池在住。方城中を卒業後、常磐高校に特待生で入学、18歳で八幡製鉄(現・新日鉄)に入社。座右の銘は「練習に泣いて、勝利に笑う。日一日怠ることなかれ」。現在も年2回ほど全国のマラソン大会にゲストで呼ばれており、目標はそれらの大会で完走できる体力を保持すること。

Marathon